

Title	岩田弘著 世界資本主義：その歴史的展開とマルクス経済学
Sub Title	H. Iwata, Historical development of capitalism and Marxian economics
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.3 (1965. 3) ,p.226(70)- 230(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19650301-0070
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650301-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

岩田 弘著

『世界資本主義』

—その歴史的展開とマルクス経済学—

飯田 裕 康

後日本労働運動史にかんする克明な叙述であり、この点全く興味深くよむことができる。しかしもつと問題史であることが必要であり、反省と批判をふくめてさらに分析的であることが望ましい。客観的な事実の追求に忠実ならんとする余り、闘争のさまざまな段階的な局面における評価が乏しいうらみがある。また「十年史」という題目のためか、安保闘争と三井三池闘争までとめられており、その後すでに五カ年になんなどとする労働運動の歩みについてほとんどふれるところのないのは一体どうしたことであろうか。「展望」というようなところで現在の緊急な問題についてふれるべきであったと思う。

以上、かなり辛らつな批判をあえてしたが、総評にたいする期待と信頼をこめて書いたつもりである。関係各位の御寛恕を願うのみである。(労働旬報社・昭和三九年一月刊・A5・七六四頁、二五〇〇円)

—一九六四・一二・二五—

戦後のマルクス経済学界における、とりわけ理論分野における大きな流れは二つある。戦前はもとより戦後の一時期、いわゆる「講座派」「労農派」の対立があったが、いまや、宇野シューレとそれに反対を唱える人々との対立というようにその潮流は変化している。ここに宇野シューレというのは、周知のごとく宇野弘蔵氏を中心とした人々によって構成され、宇野氏の経済学の三分(原理論、段階論、現状分析)にもとづいて経済学を体系化され、それに従って理論研究にたずさわる人々を指している。戦後この宇野シューレが果たした役割が非常に大きいだけに、今日この学派が変貌をとげつつあることをみるのはまことに興味深いことといわねばならない。宇野氏の経済学体系は、たんに原理論(実質的に「資本論」を中心に構成される)にのみとどまらず、資本主義経済体制の「歴史的」展開過程及び現段階を含む歴大なものであって、宇野氏の研究自体がこれらの全てを覆うものではなかった。いわば体系的まとまりをもつに至っている処は、私見によれば、原理論と段階論(宇野氏の『経済原論』及び『経済政策論』に代表される)の範囲においてであると

考えられる。したがって従来宇野氏への、あるいは宇野シューレへの批判はこの原理論と段階論とに向けられてきたことは当然のことであったといえよう。『資本論』の経済原論としての位置づけや、帝国主義段階の理論上の諸論点をめぐっての論争もこのことを物語っている。また、宇野氏自らの反批判も、専らこれら二つの領域についてなされてきたのであった。われわれは、結局のところ戦後の研究史上の貴重なメリットは宇野シューレをめぐる問題提起のなから創り出されてきたものであることを認めなければならぬ。

しかしこの宇野シューレも一つの重大な欠陥を有していた。すなわち、宇野氏自身再三の批判に答えるなかで不明瞭のままに残したものがあつた。それは原理論と段階論との関連という問題についてである。この点については、宇野氏が『経済学方法論』において詳細に展開しているにもかかわらず、段階規定の必然性が論理的に首尾一貫した説明になっていないことが指摘された。われわれは、この原因が、宇野氏における問題把握(「問題意識」)の二元性というところにあると考えるをえない。一つは原理論を貫く科学性の問題であり、いま一つは、歴史的な視点である。この両者が宇野氏において統一的につかまされず、各々別個なものとして考察されているところに問題の根源があるということなのである。

宇野シューレの最近における変貌がかかる二元性の一元化ということのために生じられたものであるとわれわれは考えたい。このような問題は本書によって最も尖鋭に表現されたのだが、これに先立つものは原理論の完結性(むしろ宇野氏の『原論』でとかれた如き

ものとして)への疑問である。その一つは鈴木鴻一郎氏の論文「帝国主義論と原理論」(『世界経済分析』所収、一九六二年)であり、それをめぐっての武田隆夫氏の批判と、そのあとの「経済学論集」誌上での大内力、遠藤湘吉両氏を加えてのシンポジウムとがこの問題を鮮明に描きだした。かかる宇野シューレ内部での動揺は、かつて宮本義男氏などによって行われた宇野氏へのこの点をめぐっての批判があつたにもかかわらず、それらがほとんど顧みられていなかったことを如実に示すものとなつたが、同時に、内部的にもこのような疑問が十二分に解決されることなく終ってしまった。われわれはこのような経過を通してみる限りで、さきにも述べた統一的な理解を措いて、宇野シューレへの有効な批判はありえないことを認識しなければならないのであり、また、宇野シューレが批判されねばならない意義もそれにより明らかとなってくるであろう。岩田弘蔵氏の『世界資本主義』と題する本書が奇しくもこのような問題把握のもとに生まれてきたことは高く評価されなければならない。

本書は全五章からなる。各章は著者によってすでに独立の論文として学術雑誌に発表されたものを主体として構成されている。それはつぎのとおりである。

- 第一章 資本主義の世界性とマルクス経済学
- 第二章 世界市場と資本主義的生産
- 第三章 価値法則と生産価格

第四章 株式資本と金融資本

第五章 帝国主義と現代資本主義

これら全五章は一本の糸によって結ばれている。著者の基本的問題意識となつてゐるものは、まず、「じつさい資本主義は、特定の諸国の特定の資本主義的産業部門を基軸とし、それに商業的ないしは植民地的に従属せしめられた種々雑多な諸生産をその国内および国外に広汎に配置するような全体としての世界市場的過程として以外には実在せず、まさにそのような世界市場的過程として、ひとつの統一的な世界編成をなす世界資本主義をかたちづくつてゐるのである。」(序I—II頁) という、世界資本主義としての資本主義の把握であり、ついで「こうした資本主義の世界性は、その経済学的分析にたいし、特殊な方法と巨人的な努力を要求する。その対象をなす現実の資本主義が、ひとつの有機的全体性をなす世界システムとしてのみ歴史的に過程するとすれば、その経済学的分析は、資本主義をそうした世界的システムとして全過程的に分析する世界資本主義分析としてしか存立しえず、したがつて、産業、商業、金融、交通、農業等々のその個々の側面の分析や、また各国資本主義の個別的分析は、ただこうした世界資本主義分析の有機的一環として位置づけられることによつてのみ、ひとつの経済学的分析たりうるにすぎぬからである。そして資本主義をこのように世界資本主義として全過程的に分析するその分析方法論をなすものこそ、マルクス経済学の理論体系にはかならない。マルクス経済学の理論体系は、それだけとりだしてみれば、資本主義がその商品経済的形態をとおし

て社会的生産をその内部にとりこみ、それを特殊歴史的な資本主義的生産として確立しつづつ、これを基軸にしてみずから統一的な有機的全体として編成していく過程を理論的に設定するものにはかならないが、まさにこのようなものとしてそれは、現実の資本主義が統一的な世界編成をなす世界資本主義として歴史的に生成し、確立し、展開するその歴史的な方法を全過程的に叙述するものとなつてゐるのであり、またそれゆえにこそそれは、右のような世界資本主義分析にたいしては、その客観的な分析方法論として位置するものとなつてゐるのである。」(序II頁) という経済学そのものの意義の確認とである。いいかえるなら、著者の分析の基本視角は、世界資本主義把握と、歴史的生成の論理としての経済学の確認とであるといえよう。われわれは以下において著者のかかる基本視角を根拠づけた諸点、すなわち、宇野経済学への反省・批判、原理論の構成と経済学の論理のもつ歴史性という二つの点に論点を絞つて、若干の検討を加えたいと考える。

岩田氏によれば、「宇野弘蔵教授の見解の基本的な特徴は、従来のマルクス経済学がいわゆる論理的展開と歴史的発展の一致を主張してきたのになら、両者の分離を主張し、経済学の理論体系から資本主義の発生、確立、発展の歴史的叙説を排除しようとする点にある」(七頁)とされるように、世界史的過程としての現実の資本主義と経済理論とをもつて一定の距離をたもたせるものといふことにな

る。すなわち、岩田氏は、宇野氏が経済学の原理論の対象とすることのできる純粹資本主義への傾向途上にかざるといふ主張にまず批判を向けられる。そしてかかる「方法」を以て「理論と対象との関係を観念的に顛倒するもの」(九頁)とされ、モデル設定と、比較検証の方法(階段論の方法に代表される)として特徴づけるのである。しかもこれに生物学上の概念を援用し、「分類的操作」(一〇頁)と名づけられる。このような批判が、岩田氏の「世界資本主義」観、とりわけ、資本主義の展開をもつて自立的過程と解されることと密接に結びつくものであることはあきらかである。ここには、経済学のうちから、分析者の方法上の主観的判断を絶つことを要求される。

このような宇野経済学への根本的批判は、岩田氏が宇野氏の業績を高く評価されることから非常に興味深い。また、すでに今日まで、宇野氏への批判者が対立的に呈示してきた経済学の体系化への志向と一脈相通するものをも有しているといふことができる。しかしながら、そこには従来の所説と基本的になつた面のあつたこともみのがすことはできないであろう。大島雄一氏が、社会的再生産の視角からあきらかにしてきた単純商品経済から資本主義、さらに資本主義の産業資本主義から独占的資本主義への発展という見解への批判とともに、氏は資本主義が商品経済の外面的ゆえに、またそれ自身の部分性ゆえに世界的性格をとらねばならないという主張にあきらかなごとく、商品経済と資本主義との関連を理論的には形態的な関係として把握する「流通浸透視角」(大島雄一氏)に基本

的にたたれる点である。かかる点からすでに論争のあつた、「貨幣の資本への転化」の論理は、岩田氏にとって決定的な重要性をもつたものとして現われるわけである。しかもこの論理の貫徹が、資本主義それ自体の歴史的展開の起動力となるというところにさらに特徴を有しているのである。氏にとっては、原理論とは世界資本主義のための、世界市場的過程を資本主義の内部機構に擬制した対象の抽象以外の何物でもない。そしてそこにおいては、平均利潤の成立、価値の生産価格化という形態規定の完成を契機とした、利潤・利子(＝信用)理論、就中、株式会社論をもつて完結する一応の原理論の体系が明示されてゐるのである。したがつて、宇野批判を根拠に展開される氏の原理論にとつて株式会社論はとりわけ重要な位置をしめてゐるといへよう。しかもこの点に関して、例のマルクスの経済学の準備ノート(の考察を通して、プランのうちにある「株式資本」までを原理論のうちも含める理解があきらかにされているのである。)(二二頁)

このように本書を貫く基本的な考え方をたどつてくると、われわれには、岩田氏のいう「資本主義の世界性」とか「世界市場的過程」といふものがいかなる意味のものであるかの理解が非常に重要なことになつてくる。まず検討されなければならないのは、資本主義的生産の本質としての商品生産(商品形態)の資本主義にとつての外面性と資本主義自体の部分性といふことである。岩田氏の場合、資本主義を世界性を保有する限りでの「自立的」な経済体制と解され、理論展開の対象としてあくまでその部分性を主張され、これが

全体性への志向と歴史的展開自体を生みだすと考えられる。しかもその推進力となるものが氏の場合商品形態なのである。われわれは、このような氏の考え方が、宇野氏への氏自身によって出された批判——現実と抽象との差位の看過——がそのままではまるようなものであると考えざるを得ない。すなわち、マルクスが『経済学批判』の「序説」においてあきらかにしたように、理論経済学は、思考による現実の再生過程であること、しかもそれが現実のたえざる接近でありながら現実とは一定の距離を保つものであること、これらのことがいつのまにか忘却されているのではないだろうか。したがって、現実には資本主義が部分的であるということ、それが理論的に抽象された場合とは自ずと異らざるをえないであろう。資本主義における世界市場的過程といわれることも、それは資本主義と非資本主義との、世界市場を形成する契機としての価格関係のうちにおける関係であることも事実である。しかし、世界市場が資本主義経済体制の全再生産過程にとって不可欠なモメントである場合、まず、資本主義の内的論理によって世界市場的過程も説明されねばならない。商品形態も、資本主義の生成過程の把握とはことなり、資本主義経済の理論的認識にとつてはそれを再生産過程の外的要因と考えることはできない。なぜなら、ここでは、商品内部の使用価値・価値という二要因自体が、資本主義的に規定されているからである。労働力商品の不断の生成によつてたもたれる資本主義的生産関係は商品形態をたんに外面的なものとしておくことはできない必然性を有しているのである。むしろ商品形態は資本主義的生産によ

り維持されつづけるのである。しかもこのような論理を非資本主義的な側面にも貫徹させようとするところにその「世界性」も現われると考えなければならぬ。

岩田氏は宇野氏の体系中に資本主義の歴史的な過程の排除をみ、それを批判して歴史的生成の論理こそ経済学の原理論たるべきであると論じた。しかるにそれは、やはり宇野氏によつて主張された流通形態論によつて世界資本主義を把握し、就中、商品形態の浸蝕性に重点を置いた把握をしようとするものであった。

(未来社・一九六四年八月刊・A5・三八三頁・九八〇円)

レンシス・ライカート著

『新しい型のマネジメント』

(Pensis Likert, New Patterns of Management.

Mcgraw-Hill Book Company 1961, p. 280.)

堀内昇

(一)

著者レンシス・ライカートは、社会調査研究所 Institute for Social Research の理事であり、又ミシガン大学の心理学と社会学の

教授として、長い間、企業やその他の団体の人間関係の究明に精魂を傾けて来た。他の数多くの研究者と同じように、じみな実証的研究を続け、一九三二年以来、心理学、社会学の研究を種々な機関誌を通して発表して来ている。

彼の最大の功績は何と云つても、「新しい型のマネジメント」其他の研究によつて示されるように、組織の中の人間関係を量的に把握し、此の若い科学の、又若い部門の人間関係が、費用の面でも熟練された調査員の面でも色々と障害があるに拘らず、実証科学としての地歩を着々と築いている時に当って、より一層実証的な科学に育て、更に又、立証された事実に基づいて可能な限り理論化すると云う努力に存すると考えられる。

彼は、一九四九年から企業の間人間関係を究明しているが、一九五八年に、組織の遂行の測定 (Measuring Organizational Performance) をハーバードビジネスレビューに発表して以来、彼の理論は多くの学者の注目をひくに至った。

今ここで論評しようと思うのは此の新しい意欲的な労作の中で、特に著者が帰納的に新しい経営組織理論を樹立しようとしている努力に関する部分であり、彼のこの最も実証的と目されている人間関係論である。今これを従来の経営組織論と比較して考えて行きたいと思う。

著者が第一章(序論)で云っているように、社会科学の発達せる調査のおかげで、今日では一般化した組織の理論は可能と考えられる。それは米国の高い生産性をもつ企業又はその内部の有能な指導

者の経営、或は統率方法の中に共通するパターン(一頁)である。勿論このパターンの骨子は我国の従来の絶対君主制の経営方法や軍隊、又古くは孫子の兵法に述べられている統率指導の理論と通ずるものがある。併しこれらは、各人が各自の経験により、各自で体得した指導理念や技術であつて、客観的に分析し、体得した個人と切り離して考えられるものではない。多くの場合、一人の人間性をもつた統率者と自働人形 (Automaton) 的な部下との関係から生れたものであつて、統率者と人間性のある個人の組織化したものとの関係としてではない。

又同じ事が米国の在来の経営についても云われる。即ち、クリスアルギリス (Chris Argyris) が Personality and Organization (1957) で云うように、マネジメントが従来の経営方針に従う限り、感情的に成長した人々の必要を満足させようとすればジレンマに陥る筈である。

一般理論としてのマネジメント理論は、この感情的に成長した人間の組織のそれであるべきであり、組織の長の人格と、彼の団体を有効に使う技術と伝達 (communication) をスムーズにする知識の三本の柱から成つていると云えよう。

そして、一般理論とは人間関係は長と部下の間でどうなっているか、団体の中ではどうなっているか、コミュニケーションはどう働くかについてのものであり、著者が心理学者として最も精彩を放っているのは、此の部分であると考えられる。

以下順を追つて論評を進めていく事にする。